

信濃教育

巻頭言

面接練習

長く教員をしているといろいろなことが起こる。教えていた生徒が親となり、その子どもが入学してくるなどということも起こる。孫のようなものだ。

その孫のような生徒が中学三年生になった。ある時、来週高校入試を受けるから、面接の練習をしてほしいと言ってきた。話を聞くと、母親が、校長先生に面接練習をしてもらえばいいと、そのおかしさようだ。断る理由もないので引き受けた。しっかりとした女の子だ。志望動機もテキパキと答える。最後に、尊敬する人はいますか、と聞いてみた。すると母親を尊敬している、と答えるではないか。

母親は、私が担任ではないが、私の担当する学年の生徒だった。言いたいことをはっきりと言い、姉御肌の性格で、学年の女子の中では一目置かれる存在であった。授業参観日に来たときに、昨年再婚したという話もしてくれた。いろんな経験をしたのだろうか、言いたいことを好きに言うのは、中学生時代と同じだ。相手が校長でもそれは変わらない。

「お母さんのどんなところを尊敬しているんですか」と、ちょっとしたいたずら心もあり、質問した。「母は、私たちを大事にしてくれるし、周りの人が楽しくなるようにいつも心がけているところが尊敬できます」と、孫はきっぱりと答えた。

私の中では、その子の母親は中学時代から変わっていないのだが、時は流れて自分の子どもから尊敬される人間になったのだと思うと、感慨深いものがあった。教員は何が彼女を成長させたのだろうかという考えたくなるが、そうではない。彼女自身が成長したんだ、と思ひ直した。

後日、「娘が母親を尊敬していると言っていたぞ」と教え子である母親に話してやったが、「そう」とだけの素っ気ない返事。少しは感激するかと思つたが、当たり前だと言わんばかり。やはり、中学時代から変わっていない。